

回り灯籠つれづれに

彼るとき彼の人々とのふれあい

プロローグ

近年、終活ブームの一環として自分や家族について何か書物を残しておこうとする気風が富に広まってきている。こうした風潮は高齢化社会の一つの象徴としてだけではなく、それに便乗するかのような新聞社や出版業界の旗振りも背景にあるのではないかと憶測している。この事例をこと自分に当てはめてみれば、既に父を見送りこの度母を失った年を基点とすれば、それ以前には自分のルーツや先祖のことなど気に留めることはごく普通の家庭の例にもれずほとんどなかった。祖父母までが全てで、彼の人々にまといつく断片的な思い出の一つ一つを懐かしむことで充分であった。したがってこうした断片をつなぎ合わせて一つの物語風に編み上げるために彼らの記憶中の出来事について改めて問うことはなかった。今となってみればくやまれることではあるが・・・これと丁度同じような状況が朝日新聞の「折々のことば」に、南木佳士の短編小説「先生のあさがお」からの引用として「みな、きちんと語ろうとするときは聞く者がいないし、真剣に聞きたいときは語る者がいないのだ」と鷺田清一によって紹介され、「時の移ろいの中で人の関係はいつもちぐはぐで哀しい」とコメントされていた(2016.11.4)。まさに軌を一にする思いである。

それがこの風潮に乗って自分史もどきの書物を残してみようとなったきっかけといえ、情けないことに暇つぶしに他ならない。子供たちに直接語りつくほどの我が人生も見つけがたく、死後、家族の誰かがふと今の自分と同じような過去との遭遇願望的な思いを抱いた時に、パラパラと拾い読みして少しでも納得してもらえることがあれば良し良しという魂胆も含まれている。さらにこれまで半世紀にわたり折角保管してきた雑多な思い出の品も何らかの形で一元的に残しておきたいという貧乏根性や、忍ぶことで供養になるというご都合主義も理由に付け加えておく。そうした断片的な資料を除けば後は自分の記憶だけが頼りで何とも心もとなく、思い込みや記憶違いも多いかと危惧されるが、それも愛嬌で真実より良く書かれていれば家族愛・自己愛や見栄にほかならず、反対の場合は確かに己に潜む劣等感のなせる技といえよう。

このような望まぬ子の出生のいわれをまるで語るかのような書き出しに臆することなく、所詮、内部資料で世に出るものではないと開き直してみる。されば記憶の風化・崩壊に備えるならば早く始めるにこしたことはない。なんでも書けばよいというものでもないだろうが、心のどこかに引っかかっている記憶はできるだけ呼び覚まして書くつもりである。デカルトの「我思う、ゆえに我あり」の如くとても哲学的とはいかぬまでも、まずは想ってみる。はたしてそうすれば、人生の下り道で抱く「人は何のために生きるのか」という問かけへの自分なりの答えを見いだすことができるであろうか？ 淡い期待を抱きながら、これよりぼちぼちと時の流れに沿って時々寄り道しながら筆を進めていくことにする。

「つれづれなるまゝに、日ぐらしパソコンに向かひて、回り灯籠の如くめぐりくる過日をそこはか
なく書き付くれば、あやうこそ懐かしきけれ」

2016.9.16

「つれづれなるまゝに、日ぐらし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとをそこはかなく書き付
くれば、あやうこそ物狂ほしけれ」(徒然草：吉田兼好より)